

日中開戦3

長崎上陸

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

地 挿
図 画
平 安
面 田
惑 忠
星 幸

目次

プロローグ	13
第一章 先手必勝	22
第二章 非武装都市宣言	45
第三章 長崎市占領	74
第四章 邂逅	103
第五章 ラビュリントスの首飾り	130
第六章 キリンググ・ゾーン	160
第七章 裏の裏	188
第八章 佐世保へ続く道	214
エピローグ	231

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 二佐。ようやく傍若無人の上司、同期と離れ、心機一転するつもりだったが？

原田小隊

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 二曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 二曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 三曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 士長。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき
吾妻大樹 士長。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

姜小隊

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 二曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

みどうそうま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

い いかける
井伊翔 二曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 三曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ポーンズ。

ゆ ら しんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

おだぎりしやう
小田桐将 一士。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。
あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

訓練小隊

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊〉

なかわらひろみ
中村弘臣 一佐。西方普連を率いる。

しばひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官に異動となった。

おおさこかつひろ
大迫勝弘 二佐。副連隊長。鹿児島県出身で、地元の私大から自衛隊に入った。

きんじやうきとる
金城哲 一尉。偵察班を率いる。一般大から自衛隊に入り、たちまちレンジャー資格を取った沖縄県人。コードネーム：クイナ。

[陸上幕僚監部]

あしはらよしみち
芦原義道 陸将。陸上幕僚監部幕僚副長。

やまぐちいさむ
山口諫実 二佐。装備部需品課。一般大卒の經理畑。福江島出身。

[海上幕僚監部]

よないはるお
米納晴郎 海将。海上幕僚長。

[航空幕僚監部]

ふじさわかずき
藤沢一輝 空将。

《内閣》

あさうしろう
阿相士郎 副総理兼財務大臣だったが、きしべしんのすけ岸部真之輔が総理を辞任後に新総理となった。音無に促されて、サイレント・コアの設立に関わっている。

ごん だ ひ と し
権田均 警視正。総理秘書官。

かとうしやうへい
加藤昇平 官房副長官。警察庁出身。

う こん き み はる
右近公春 内閣官房。

《外務省》

くしだふみお
櫛田史雄 外務大臣。

いしかわしのぶ
石川恕 中国課長。

《警察庁》

おおいずみまなぶ
大泉学 警視監。警察庁次長。

かあいてつや
河相鉄也 警視正。国家安全保障局に派遣中。右近公春とは学生時代からの付き合い。

ばばけいじ
馬場啓治 警視。長崎県警本部管理官。

まさきはらけいすけ
笹原啓介 警部補。警視庁特殊急襲部隊副隊長。

みきたにけい
三木谷啓 警部補。特殊犯捜査第二係。人質交渉人。

〈長崎県〉

まつながはじめ
松永肇 長崎県知事。漁師の家に生まれ、苦勞して地元の国立大学を出て、長崎県初の県庁生え抜きの知事として二期目を務めている。

たなかりつし
田中立志 副知事。

〈熊本県〉

うらしまむつみ
浦島睦実 熊本県知事。農協職員として渡米中に学問に目覚め、ハーバードで博士号を取り帰国した変わり者。

〈福岡県〉

おがわひろし
緒川博 福岡県知事。元内閣広報官。

中国

[政治委員]

ファンチエンチエン
方建中 少将。戴志強中将与とは子供の受験で確執があった。

タオチンチエン
陶景臣 大佐。政治委員補佐。南海艦隊から異動してきたばかり。

《海軍》

[東海艦隊司令部]

タイチイカイアン
戴志強 中將。東海艦隊司令官。清廉潔白な人物。

スンルンシオン
孫潤生 少将。東海艦隊参謀長。艦隊ナンバー3。

カンウエンホァ
康文華 大佐。東海艦隊情報参謀。

シュイチオンピン
徐正平 大佐。作戦参謀。

フォホンウエン
付弘文 大尉。紅稗型ミサイル艇2255号の艇長。四川省の山奥出身。

モツン イ リン
孟晓霖 大尉。紅稗型ミサイル艇2245号の艇長。

レン ア ビン
任亜平 中尉。紅稗型ミサイル艇2245号の副長。ベテラン機関長。

《陸軍》

[第16空挺軍団]

トゥヨンシン
杜永新 大佐。第16空挺軍団第145空挺連隊を率いる。

シアオイエンチウ
邵彦祖 中佐。副連隊長兼政治将校。

スンリイリイ
孫麗麗 中佐。作戦参謀。事実上のナンバー2。司馬光二佐の因縁の相手。

リュチイエンフエイ
盧劍飛 中佐。連隊情報参謀。

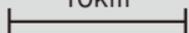
イェンシュエハイ
嚴学海 少佐。第一中隊を率いる。



長崎周辺地図



10km



西海市

東シナ海周辺図



済州島

福岡

長崎

福江島

東シナ海

上海

舟山市

那覇



100km



日中開戦3 長崎上陸

プロローグ

海上自衛隊鹿屋基地は、東風21D空母攻撃用弾道弾ミサイルの攻撃が終わってから静まり返っていた。

爆風が建物の窓をすべて吹き飛ばし、エプロンに面した格納庫にも甚大な被害を与えていた。

しかし、鹿屋基地は広大な面積をもつ。逃げる場所は山ほどあった。

また練習ヘリ部隊の離陸も間に合っている。戦闘機より足が遅いP-3C部隊は、すでに全機離陸した後で、志布志湾上で旋回飛行しつつ編隊が揃うのを待っていた。

第一航空群司令の曾野太郎海将補は、ゴージェ

にマスクという格好で作戦幕僚を従えると管理棟裏の掩体壕を出た。

一歩足を踏み出すたびに、砕け散ったガラスがじゃりじゃり音を立てる。

まだ爆煙が立ちこめていて、視程は三〇メートルほど。

耳を守るためのイヤマフを脱ぎ捨てると、曾野は、「イージス艦でも終末段階の弾道弾を迎撃できると船乗りは豪語していたが、あれは大嘘だったな！」と吐き捨てるように言う。

「まあ、開発中のスタンダード・ミサイルでは、その性能も付与されるみたいですから、期待しま

しよう」

そう作戦幕僚の若杉秀一佐が答えた。

「そんなものの完成を待つより、P-3Cにエアボーン・レーザでも搭載した方が、早いんじゃないのか」

全員がマグライトを持ち、二人と同じ装備で外に出てくる。

誰かが、携帯のワンセグを点けた。NHKが臨時ニュースを流しているようだ。

築城と新田原で、大きな爆発が複数回繰り返されたようだ——そうアナウンサーが早口で喋っている。

「……鹿屋の情報はなしかよ」

「ここは、最果ての地ですからね」

「最後のリーダー画像では、狙われたのはメジャーベースの三箇所だけだった。築城はPAC3で守っただろうが、当然、撃ち漏らしはあったはず。

うちはそれほど厳しいマークではなかったと思うが、弾道弾の命中率を考えると、せめて滑走路を外してくれていることを祈りたいよ」

一行がエプロンへと出る頃には、鹿屋でも爆発があったことがニュースになっていた。

携帯は通じない。なぜかわからないが、電磁波障害が出ているようだ。

ワンセグの映像も途切れがちだった。

「救難飛行隊と連絡が取れました！ 通信状態は悪いですが、とりあえず話せます!!」

無線機を担ぐシステム通信分遣隊の尉官が叫ぶ。救難飛行隊のヘリは、とっくに上空に上がっていた。

「どこにいるんだ！ ローター音は聞こえるが……」

「風上側、高度三〇〇〇フィート。前方赤外線監視装置で見下ろしているそうです」

「被害状況は確認できるのか！」

「はい。基地外の民有地に二箇所着弾があるそうです。基地内は、駐車場に一発、滑走路エリアに二発。繰り返しします。滑走路エリアに二発です！」

「滑走路を直撃したのか?！」

それに対する返事は、しばらく時間がかかった。

「……一発は、エプロン東端。もう一発は、メイン滑走路の西エンドから七〇〇メートル、南側に五〇メートルほどずれているみたいです。泥は被っています、滑走路自体は大丈夫なように見えますと……」

「よし、いけるぞ！ 工作隊はただちにダンプを出動させる。手の空いた者はスコップとほうきを持って滑走路に出るんだ!! 救難ヘリは、着弾点の中心点を割り出して、正確な図形作成を指示しろ」

「こんなんでも騙せますかね。だって向こうは、発

射したミサイルの数を知っているんですよ？ 打ち上げた当人ですからね」

作戦幕僚は疑問ありげに言った。

「だが、スパイ衛星でここを覗いてミサイル部隊に報告する連中は知らないだろう。落下したミサイルが一、二発多かったからといって、わざわざあれは敵が滑走路に土塊をばらまいて、被弾を偽装したものだろう、なんて無粋なことはいちいち言わないさ」

今後また遅かれ早かれ東風21Dが発射されることは間違いないだろうが、その攻撃は、ここよりも空自基地に集中するはず。ある程度の被弾は避けられないにせよ、滑走路だけは逸れてくれることを祈るしかない。運良くその願いが叶った時は、自分たちで滑走路の破壊を偽装し、敵の目を欺く——鹿屋基地がとった作戦は、こういうものだった。

早速、ダンプカーが一〇台出てきて、爆撃跡を偽装するために主滑走路上に二箇所、大量の土をばらまいた。それをブルドーザーで同心円状に均すと、更に人力作戦で、放射線状に土塊や滑走路の破片が飛び散った痕跡を偽装する。

彼らは、その作業を三〇分でやってのけた。

上空から、救難ヘリの前方赤外線装置で観察しても、真性のクレーターと見分けが付かないとの報告もあった。

だが、三〇分経っても防衛統合デジタル通信網は復旧せず、飛び立った部隊からの報告もない。

洋上の戦況は、わからなかった。

総理官邸地階のオペレーション・センターでは、つい数時間前に総理大臣に返り咲いたばかりの阿相士郎総理大臣が、上座のテーブルの、そのすぐ

前の床に置かれている32インチのモニターを凝視していた。

官僚たちが見遣るモニターは、上座の後ろの壁に掛かっている。

総理大臣がいちいち振り返って見上げるわけにもいかなないので、上座用のモニターは、見下ろす形で床に置いてあるのだ。

そのモニターには、市ヶ谷の防衛省の地階にある、中央指揮所の大会議室のうす暗い様子も映し出されていた。

何やら幹部連中が雁首を揃え、慌てている様子だ。

「おい、何が起こったんだ？」

阿相は、モニターを挟み、五メートルほどの距離の最前列に陣取った自衛隊の制服組に問う。

そこで最も高位な、海上幕僚長の米納晴郎海将が「中国軍の戦闘機部隊です」と答えた。



「大陸を発した編隊のようです。ある程度、予想されたことではありませんが……」

「それは、リーダーに映っているということだろう？ 福江島ふくえじまのリーダー・サイトとか、空飛ぶリーダー・サイトとかのリーダーに？」

「はい。空自の管轄ではありますが、そういうことになります」

「ここで見られないのか？——おい！ そのリーダーの情報を官邸で見られないのか!!」

阿相は、後半をマイクに向かって怒鳴った。

中央指揮所から、航空幕僚長の藤沢一輝ふじさわかずき空将が気もそぞろな表情で「技術的には可能なはずです」と応じる。

「では見せる。映せ！」

「残念ながら総理。この情報は、米軍とも共用している極秘情報でありまして、米軍の許可無く、外部の者に見せることはできません。総理お一人

ならば、ともかく」

「バカじゃねえの?! お前ら——」

阿相はその瞬間ぶち切れて、いつものべらんめえ調に切り替えた。

「おめえら、その米帝様から見捨てられたんだろ？ この期ごに及んで、米帝に忠義立てするなんて、アホかいな……。さつさと映せ!!」

阿相は、自らマイクのカフを切り「俺に逆らう奴は、この手で撃ち殺してやるぞ……」と毒づいた。

しばらくすると、未だ爆煙おほに覆われている新田原基地を上空からへりで空撮している映像に切り替わる。

それは、NHKの空撮映像だった。夜だというのに、基地の外だけは、真昼のように明るく映っていた。

その画面が、航空自衛隊の自動警戒管制システム

ムのスクリーン映像に切り替わると、総理大臣の目の前だというのに、米納海将がよろよろと立ち上がり、「なんてことだ……」と呻く。

米納ならずとも、呻きたくなる状況だった。

大陸から、東シナ海を挟んで無数の輝点^{きでん}が迫っていた。

その一つ一つが、戦闘機なのだ。まるで針^{はり}の束が数百本飛んでくるような感じだった。

「いったい、これは……。数は何機いるんだ？」

阿相は、自らマイクのカフを上げ「敵は何機だ!？」と問うた。

「現在、カウントできているところでは、二三五……いえ、二四八機です。おそらく、まだ増えます」と空幕長が報告する。

「あり得ないだろう。中国空軍は、こんな大量の戦闘機を同時に発進させ、東シナ海を渡洋攻撃できるまでに成長したというのか……」

阿相は、茫然^{ぼうぜん}として言った。

「このうちの数十機は、おそらく旧型の戦闘機で、ひよつとしたらミサイルの一発も搭載していないかもしれません。全てが全て、脅威^{きょうい}だというわけでもありません」

「味方は何機だ？」

「防府^{ぼりう}や、岩国^{いわくに}を経由して駆け付ける本州の部隊も含めて、イーグル戦闘機がおよそ五〇機です。

あと、長崎^{ながさき}県にはパトリオットのPAC2部隊も展開しておりますし——」

「君らがいつもこだわる戦力差は、どのくらいになる？ 五対一とか、六対一、ひいき目に見てそんなものか？ だが、こちらの攻撃機は、九州本土上空から対艦ミサイルを放って逃げれば、何とか間に合うな」

「総理、万万が一のため——発射したミサイルが故障し、住宅地に落ちて住民被害を出すことを回^か

避するため——こちらの攻撃機は、長崎や佐世保^{させぼ}沖洋上へと出て、南北から敵艦隊を挟み込んでミサイル攻撃を仕掛ける手はずになっています。すでにそのコース上にあります」

と、海幕長が苦々しい顔で説明した。

「おい、俺はオタクじゃないが、鉄砲撃ちだ。あの程度の知識はある。すると、何か？ 君らは、接近する中国の戦闘機に対して、しばらく横腹を見せて飛ぶわけだな。被弾面積が拡大するわけだ。それだけ狙われやすくなり、一方、正面を向くこちらのレーダーでは、敵は映りにくくなる。そういうことか？」

「はい。一般論として言えばそうなります。残念ながら、それは、避けられないかと……」

「そして、中国軍の戦闘機が空対空ミサイルをこちらに発射すると、われわれが空対艦ミサイルを発射するのは、ほとんど同時ということになる

な？」

カメラの向こうで、自衛隊の幹部が何やら密談をはじめた。

「——おい、將軍ども！ 時間は無いぞ。パイロットと高価な戦闘機を見捨てるつもりか!？」

「総理、もしここで攻撃を躊躇^{ためら}えば、敵の揚陸艦隊を止める術はありません。やらせてください!!」

空幕長が、マイクに向かって声を張り上げた。

「陸は、確か射程の長い地对艦誘導弾を持っていただろう。どこに配置した？」

阿相^{あが}が質すと、目の前に座っていた陸上幕僚監部幕僚副長の芦原義道^{あしはらよしみち}陸将が、「佐世保と、長崎近郊に配置しました、その二都市を守れるよう」と口を開く。

「では、その二箇所にあんな大きな揚陸艦が近付いたら、攻撃はできるな」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。